

自閉スペクトラム症児の保護者の育児負担感 —平成28年度調査の報告—

Report of burden of child with autism spectrum disorder raising perceived by parents

○中岡和代 (OT)^{1,2)}, 立山清美 (OT)¹⁾, 倉澤茂樹 (OT)³⁾, 丹葉寛之 (OT)⁴⁾, 高畑進一 (OT)¹⁾

¹⁾大阪府立大学地域保健学域, ²⁾大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科博士後期課程, ³⁾関西福祉科学大学保健医療学部, ⁴⁾藍野大学医療保健学部

Key words: 自閉症スペクトラム症／障害, 家族, 調査

【はじめに】母親の育児負担に関する研究は国内外で報告されており、障がい児の母親において育児負担感が高い傾向が示されている。しかし、対象とされている児は低年齢児が多い。我々は3～18歳の自閉スペクトラム症(ASD)児の保護者の育児負担感について調査したので報告する。本研究はJSPS科研費(16K04839)の助成を受け実施している。

【方法】対象：3～18歳のASD児の保護者。データ収集方法：療育施設やASD児の保護者が所属している親の会などに研究協力を依頼し、保護者の同意が得られた場合のみ郵送にて返送してもらった。データ収集内容：基本情報、育児負担感指標(中嶋ら,1999)。使用した育児負担感指標は[社会的活動制限]に関する4項目と[児に対する否定的感情の認知]に関する4項目で構成されている。各項目について0～4の5件法で尋ねる形式になっており、得点が高いほど負担感が強いとされている。データ収集期間：平成28年8月～平成29年1月。分析：①育児負担感指標の得点平均([全項目][社会的活動制限][児に対する否定的感情の認知])を3～6歳, 7～9歳, 10～12歳, 13～15歳, 16～18歳の年齢別で算出した。②育児負担感指標の得点 ([全項目][社会的活動制限][児に対する否定的感情の認知])と児の年齢について相関関係の有無を検討した(Spearmanの順位相関係数, 有意水準 $p<0.05$)。なお、本研究は研究倫理審査委員会の承認を受けている。

【結果】285名から回答を得た。収集したデータのうち、未回答項目等があった17名は分析対象から除外し、268名を分析対象とした。回答者は母親259名, 父親8名, 祖母1名であった。平均年齢は43.8(SD±5.8)歳で、最終学歴は中学卒2名, 高校卒50名, 短大(専門学校)卒122名, 大学(大学院)卒92名であった。児の性別は男児215名, 女児53名で、平均年齢は10.9(SD±4.2)歳であった(3～6歳55名, 7～9歳50名, 10～12歳58名, 13～15歳55名, 16～18歳50名)。分析①育児負担感指標の得点平均は[全項目]：全年齢11.1(SD±6.6)点, 3～6歳11.5(SD±7.3)点, 7～9歳11.5(SD±5.9)点, 10～12歳11.3(SD±6.7)点, 13～15歳10.8(SD±6.5)点, 16～18歳10.5(SD±6.6)点であった。[社会的活動制限]：全年齢5.1(SD±4.0)点, 3～6歳6.1(SD±4.7)点, 7～9歳5.2(SD±3.4)点, 10～12歳5.4(SD±4.3)点, 13～15歳4.8(SD±3.9)点, 16～18歳3.9(SD±3.3)点であった。[児に対する否定的感情の認知]：全年齢6.0(SD±3.7)点, 3～6歳5.5(SD±3.6)点, 7～9歳6.3(SD±3.7)点, 10～12歳5.9(SD±3.4)点, 13～15歳6.0(SD±3.7)点, 16～18歳6.6(SD±4.1)点であった。②育児負担感指標の得点と児の年齢の相関は[全項目]： $r=-0.065$, $p<0.285$, [社会的活動制限]： $r=-0.169$, $p<0.005$, [児に対する否定的感情の認知]： $r=0.059$, $p<0.331$ であった。

【考察】定型発達児の母親を対象とした先行研究では育児負担感の全項目の得点平均は9.0～9.7点と報告されており、本研究の対象である3～18歳のASD児の保護者は、定型発達児の保護者よりも育児負担感が高い傾向にあると言える。中嶋ら(1999)の研究では心身障害児通園施設を利用し就学前の児の母親を対象に育児負担感指標を実施し、育児負担感指標の得点平均[全項目]：11.6(SD±6.55)点, [社会的活動制限]：6.1(SD±3.99)点, [児に対する否定的感情の認知]：5.5(SD±3.47)点と報告している。我々の調査結果も3～6歳の就学前の児においては同様の結果を示している。但し、育児負担感指標の得点と児の年齢に相関は見られなかった。育児負担感の要因については家族構成、受けている支援、行動障がいの重症度等が考えられるため、更なる検討が必要である。